新型コロナの中、ある保育園から

福祉保育労　向田　智美

保育園は何があっても休園することなく、社会を支えるために働く保護者にかわり、その子を保護し養育する施設です。

その保育園が、新型インフルエンザ等に対する特別措置法による緊急事態宣言により自治体から臨時休園や登園自粛要請を受けました。

休園要請は＜命を護るため＞ということ。しかし、「命を護る」は、保育の根底です。その上に豊かな保育が成り立つわけで、私たちは豊かな保育をより確かなものにするため、厚生省が定めた＜０歳児３人に対し保育士１人、４・５歳児３０人に対し保育士１人＞などの保育士配置基準を、大幅に改善するために長年交渉や署名などの活動を続けてきました。

それが、自治体から＜命を護る＞を要請される立場になり、自粛家庭は増え、登園する子どもは減少し、数字だけ見れば「理想的保育士配置」が実現しました。しかし、肝心な中身はまったく違います。

必要だから保育園を利用している保護者に対して、休園や給食の停止などではいろいろ負担や迷惑をかけてしまいました。

私たちは保護者にかわり、乳児のオムツを替え、ミルクを与え、抱っこして話しかけるのが仕事です。年長児は友だちと遊び、けんかしながら成長して行きます。一人ひとりの子どもを集団の一員として支えます。密接、密着を避けてヒトの子を人間に育てる保育が成り立つのでしょうか。

保育園は豊かな保育を考えるどころではなくなってしまいました。

混乱の中、とにかく感染対策が最優先となり、園を利用するすべての人が触るあらゆる部分の消毒を徹底しました。子どもが遊ぶ小さなブロックも、ひとつひとつ消毒薬をしみこませた布で拭き、次は別の布で消毒薬をふき取っていきました。空気の循環のため、窓を開け、大型扇風機や空間除菌機器、空気循環機器を購入し使用しています。

なかでも、職員が絶対に感染してはならないことは重要でした。もし感染したら、保育園は2 週間完全閉園となり、保護者にも園にも迷惑が掛かってしまうからです。世間の批判も怖い。何より自粛保育中に、「早くみんなと遊びたいな」と我慢している子どもにもっとしわ寄せが行ってしまうでしょう。

自粛解除

自粛解除となり、子どもと保護者のケアをしつつ、園には賑やかさがもどってきました。

私たちは、以前から休憩時間を返上し、それでも間に合わず自宅で書類を処理してきました。人手不足のため、休暇を取り難い忙しさが戻ってきました。しかし、それだけでなく、「ウイズコロナ」の掛け声のもと職員や子どもが感染しないプレッシャーが加わり、「せんせーおはよー」と駆け寄ってくる子どもを抱き上げ「おはよー」と笑顔で返すことさえ躊躇するという、何もかも自己責任・自己努力の「新しい日常」がはじまりました。

コロナの出来事が起こる前には効率や経費節減などを口実に、人間を大事にしない社会、弱者切り捨て、自己責任の社会が進んでいました。

今の子どもは、やがて大人になります。この未来の大人のために、私たち大人が今の社会の何を護り、何を変える必要があるのか。本当に人間が大切にされる社会を作っていくために、何ができるのかを考える本当の「新たな日常」こそ広がってほしいと切に願います。すべての子どものために。